

テクノロジーで、国産漆を取り戻せ。

「国内で使われている漆の約97%は、中国産をはじめとする輸入モノなんです。」
そう語るのは、浄法寺漆産業の松沢さん。彼の地元・岩手県は、昔から日本一の漆産地。
しかし、漆が職人の高齢化も進み、このままでは国産漆が生産や文化を守る活動を開始した。
松沢さんは、その危機感から10年前に起業。漆の生産や文化を守る活動を開始した。
さらに、文化庁も国宝や重要文化財建造物の修繕に国産漆を使う方針を決定。
そんな時に出会ったのが「衝撃波破碎技術」だった。実用化されると、
木を植えてから採取できる漆の量が増加するほか、
木を植えてから採取までの期間も短くできるという。

今はまだ実証段階だが、みらい基金の助成金を活用して
研究が進められている。最近では、耕作放棄地に
漆の木を植えたいという地元の声も増えてきた。
日本を代表する企業と国産漆を使ったプロジェクトも進んでいる。
「日本から漆が消えたら、この国は日本じゃなくなりますから」
そんな松沢さんの想いは、今日も漆のように美しく輝いている。

農林水産業みらい基金は、助成金を通じて、浄法寺漆産業の
「衝撃波破碎技術」を活用した漆採取の実用化と
漆の植栽の取組をサポートしている。

